
アイスハンドマン

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイスハンドマン

【Nコード】

N5743P

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

彼がタイフーンマンズと出会う前は、どういう形で活動していたのかが分かるストーリー。台風X号オールスターズヒーロー小説シリーズ第三弾！season制

第一話 悲しみからの始まる正義（前書き）

アイスハンドマン誕生は、惨劇からの始まりであった。

第一話 悲しみからの始まる正義

フランスのパリに3人家族の人物がいた。

アイスハンドマンの父と母、そしてアイスハンドマンになる少年であつた。

「ロシアのバイカル湖というところで観光でも楽しもうか。」

「早く行きたいよお父さん。」

「バイカル湖のあたりは、とても寒いだよ。」

「良いのイルクーツクのお土産を買って友達に自慢するんだ。」

少年は、これから起きる出来事を知らずにいた。

ロシアは、とても寒いところだが、ロシア人は寒いからこそ知恵を使っている。

それに心も温かいため、ロシアとはよその国から来た人の歓迎はとても心地よく寒いことを忘れられるほどであつた。

しかし、古の集団が刻一刻と少年のいるイルクーツクに向かっていった。

そして、次の日イルクーツクの人たちがパニックに落されていた。

父親と母親は、少年にこう言った。

「お土産は買えなかったけど、いいバイカル湖のあるところに隠れて。」

少年は、細い場所に隠れた。

そして、足を崩してバイカル湖に落ちてしまった。

少年は、命を落としたかのように見えたが、スーパーパワーをバイカル湖で得た。

アイスハンドマンが誕生したのである。

イルクーツクは、まるで空襲を受けたように静かだった。

アイスハンドマンは、両親が殺されているのを見て怒りと涙が込み上げていた。

アイスハンドマンは、スーパーパワーで古のメンバーを次々と倒した。

第一話 悲しみからの始まる正義（後書き）

次回 第二話 西へ帰るヒーロー。お楽しみに

第二話 西に帰るヒーロー

アイスハンドマンは、西に向かっていた。

「氷を使える僕なら、きっと正義として役立つかも。」

アイスハンドマンは、一人の軍人を見つけた。

「君、空を飛べるんだ。」

「えっ、僕。」

アイスハンドマンは、軍人に聞いた。

「君、なんていう名前なの？」

「俺は、コース・トロ・ビーティーという名前なんだ。B Tと呼んでもいいよ。」

アイスハンドマンは、まだ此の軍人がスーパーヒーローだということはまだ知らないでいた。

モスクワに極悪な組織、古が襲来していた。

「助けてくれー！」

アイスハンドマンは、モスクワに向かっていった。

「古共、降伏しろ！」

「バイカル湖で死んでいったと思っていたのにな。」

古の下級戦闘兵がアイスハンドマンに襲いかかった。

「氷拳！最上氷弦！」

氷の拳が、下級戦闘兵に当たり、下級戦闘兵たちは気絶した。

古の一人、ルーネヴとシクヴァリオンは、特殊能力でアイスハンドマンの力を弱らせていた。

「畜生！身動きが取れない。」

軍人がやってきた。

「BT来てはだめだ。」

「俺も実は君と同じスーパーヒーローなんだよ。」

BTは、両腕を大砲に変形させた。

「行くな、最強の力を！」

大砲をぶっ放したBTは、ルーネヴとシクヴァリオンを吹き飛ばした。

「ありがとう、BT。」

「俺もスーパーヒーローだということをすっかり言うの忘れてしま

「
ったから。」

「一緒に戦おうよ。」

「ああ、そうしようか。」

第二話 西に帰るヒーロー（後書き）

次回 第三話 二人のヒーローの強さ。お楽しみに！シーズン1は全部で12話まであります。

第三話 二人のヒーローの強さ

アイスハンドマンとBTは、手を組んで古の二人を倒すことにした。

ルーネヴは、アイスハンドマンをロープで拘束した。

「おまえを倒す。」

「氷を使えば、俺は強い。」

ロープを凍らせて、相手の手を氷で凍えさせた。

「冷たい・・・」

「アイス爆破！」

アイスハンドマンの攻撃がロープを破壊した。

爆風がルーネヴを襲った。

「ぐわあああああ！」

BTは、シクヴァリオンの攻撃を止めていた。

「私の攻撃を食らえ！」

片腕が戦車の発射砲に変形してその腕でシクヴァリオンを殴った。

二人は、のちにロシア警察に捕まった。

アイスハンドマンとBTは、ロシアを守るヒーローとなった。

そのあと、アイスハンドマンは、カムチャツカ半島の南端に移動した。

「古という悪者は、俺が倒す。」

第三話 二人のヒーローの強さ（後書き）

次回 第四話 無差別な相手。お楽しみに！
小説主題歌が間もなくようつべに

第四話 無差別な相手

B Tとアイスハンドマンは、共に別々の場所で活動することにした。

「また会えたら、色々話してやるよ。」

「B T、ありがとう！」

アイスハンドマンは自分以外のスーパーヒーローに出会えてうれしい気分であった。

「いつか、ロシアにいるスーパーヒーロー達と手を組んで組織でも作りたいなあ。そうすればロシアは腕白で元気で平和な国になれる。」

アイスハンドマンの希望はのちに、タイフーンマンズ達が叶えるのであった。

カムチャツカ半島の南東部の付近に謎の強盗集団がいるということを知った政府の一人から聞いた。

「アイスハンドマン、早速だがカムチャツカ半島南東部に強盗集団がいるという報告を受けた。」

「強盗集団ですか？」

「そう、それ以外の詳しい情報がつかめていないからぜひ突き止めてほしい。それと撃退を頼むよ。」

「分かりました。」

アイスハンドマンが立ち去ろうとした時、政府の職員が一言かけた。

「あつ、もし力不足のときは、ベーリング海をいつも泳いでいるスーパーヒーローがいるからその者に聞くがよい。」

「なるほど、そこにもいたのですか。」

「ロシアは、スーパーヒーローを持つ国の中では世界二位だからね。」

アイスハンドマンは、強盗組織の屋敷を見た、

強盗は留守のようだ。

しかし、屋敷の守りが堅かった。

「くっ・・・ビームの弾幕か。」

アイスハンドマンの作戦が強盗集団の痛手を作ることになる。

第四話 無差別な相手（後書き）

次回第五話瞬間凍結作戦。お楽しみに！

第五話 瞬間凍結作戦

アイスハンドマンは強盗が来る前に鉄壁を砕く作戦を考えた。

「レーザービームはどうやら感知して弾幕のように撃ってくる。気がつかれないようにするには、そうか！これだ。」

アイスハンドマンは、地面に自分の体から出した氷を置いた。

アイスハンドマンは、その氷を両手で持ち投げた。

レーザーがそれに反応して氷を砕くと粒子が散らばった。

粒子は、レーザー砲に付着するとたちまち凍り始めた。

そして瞬間凍結したレーザーは、バラバラになった。

「よっしゃ！」

アイスハンドマンは、ビクトリーポーズを付けた後、冷静にその強盗のアジトで身を隠した。

そのあと、強盗らがきて驚いていた。

「誰かが、侵入してレーザー砲粉々にされているぜ！」

「ああ、しかし、中に入った痕跡も無い。」

「警戒して進もう。」

第五話 瞬間凍結作戦（後書き）

次回第六話ひっ捕らえろ！アイスハンドマンの勝利。お楽しみに。
シーズン1は全部で13話入っています。タイフーンマンズの人気に負けるな。

第六話 ひっ捕らえる！アイスハンドマンの勝利

強盗集団は、盗んだものを見ていた。

「これだけ盗めたのは、最高だったぜ！」

アイスハンドマンは、氷を飛ばして宝石などの状態を見ていた。

「なるほど、奴等はこのように盗んでいるな。」

アイスハンドマンは、ある作戦を思いついた。

「よし」

強盗集団が次の場所に盗みに行くことにした。

だが、アイスハンドマンは先回りしていた。

強盗集団はアイスハンドマンを見つけた。

「なんだあいつは。」

アイスハンドマンは車の一部を凍らせてタイヤに触れさせてパンクするように仕込んだ。

「こいつ、よくも！」

殴りかかった強盗の一味は、アイスハンドマンの氷の拳で一網打尽にされて、御用となった。

「今回は、作戦は思い通りだった。」

一方、古の者の一人はアイスハンドマンの活躍を知っていた。

「まさか、湖に落ちて死んだ少年じゃないのかあいつは。」

第六話 ひっ捕らえる！アイスハンドマンの勝利（後書き）

次回 第七話 オプランの謎前編。お楽しみに！

第七話　Oプランの謎前編

カスピ海の観光船でゆったりと過ごしているアイスハンドマン。

「今日は平和だから、くつろぎやすい。」

アイスハンドマンはくつろいでいたが、オホーツクの方では・・・

「チャルス終わりだな。」

「だれが此処で終わりだって。」

羽と左手にキャノン砲を持つヒーロー、チャルスがいた。

「そう簡単には終わらせないぜ古のクソどもっ！」

チャルスは左腕のキャノン砲を古の二人組に突き付けた。

「この攻撃で少しは尻尾でも巻いて逃げていろ！」

チャルスは威嚇攻撃で相手を脅かして逃がした。

だが、謎のカードを見つけた。

「これは！」

チャルスはOプランというカードを見つけた。

そのカードに書かれていた中身とは一体？

次回に続く

第七話 オプランの謎前編（後書き）

次回 第八話オプランの謎後編。お楽しみに

第八話　Oプランの謎後編

チャルスは謎のカードを見て何かに気がついた。

「誰だ！」

古のロボット兵士であった。

「なるほど、このカードに秘密あるんだな。」

チャルスは左腕のキャノン砲でロボット兵を蹴散らしていった。

しかし、数がどんどん増えていた。

「数が多くてきりがない。」

その時である。突然白い閃光がロボット兵を半分に削った。

「BT、お前か。」

「ああ、助太刀するぜ！」

一方、アイスハンドマンは・・・

「あれ、もしかして古のロボットか。」

第八話 オプランの謎後編（後書き）

次回 第九話 古の第一波前編。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5743p/>

アイスハンドマン

2012年1月13日18時51分発行